

東京都交友会 秋の大会 一般公開講座

太田道灌と江戸・東京

講師 太田 資暁 先生
(NPO法人太田道灌顕彰会理事長)



太田資暁と申します。本日は貴重な機会を与えていただきまして大変ありがとうございます。これから約一時間、太田道灌の実績についてお話ししたいと思います。

私は今、二つの夢みたいなことをやっております、一つは2020年、東京オリンピックの年にNHK大河ドラマで太田道灌をやってもらおうことで、だいぶ良い風が吹いてまいりましたので、ひよっとすると2020年、太田道灌が大河ドラマになるかもわかりません。それからもう一つは江戸城天守閣を再建したいと。これは2030

年ぐらいですね。安倍総理大臣も2030年には海外からの観光客を六千万人にしたいと仰つてますので、その風に乗っていききたいなあと思っております。

それから私は太田道灌「子孫」と言っています。太田道灌は突然謀殺されてしましまして、家督がどこへ移ったかが分かっていないわけです。従つて当主だとか直系とかいう言葉は使いませんが、太田道灌子孫と言っております。

最近若い人は太田道灌をあまり知りませんが、太田道灌は徳川家康の家来だと思つていらっしゃるのですけれども、そうではございませんで、家康よりも150年も昔の人でございます。

道灌活躍の時代

道灌が活躍したのは1450年頃で、このときは

関東は政権が二つに分かれておりました。鎌倉公方と古河公方ですね。茨城の古河に一つの政権があり、利根川、荒川を挟んでの壮烈な領土争いをしておったわけです。そもそもこういうふうになったの

は足利尊氏が関東公方という独立政権を作つてしまったのが混乱の原因なんです。尊氏は関東の人ですから、京都に室町幕府を作つたのですけれども、関東の重要性を良く知っていますので、鎌倉に自

表1

時代背景 (1450年頃)
(1) 関東に2つの政権が出現 鎌倉公方…神奈川県、東京都、埼玉県、群馬県 古河公方…茨城県、埼玉県、栃木県、千葉県
(2) そもそもは足利尊氏が関東公方と言う独立政権を作つたのが混乱の原因
(3) 人事上のミス ・ 足利義満の突然の死。徳川家康が反面教師にした。 ・ 関東では長尾景春の乱 (戦国時代の始まり)
(4) 凡庸な為政者達 (血統と家柄だけ)
(5) 道灌と早雲 (司馬遼太郎作「箱根の坂」)

分の一番末っ子を関東公方として下向させます。まあそれはそれで良かったのですけれども、時代が経るに従つてだんだん鎌倉と京都が喧嘩をするようになりまして。でもまあ、鎌倉が火の海になって灰になつて古河に一つ政権が出来たと、こういうことです。

で、人事上のミスと書いておきましたけれども、とにかく足利幕府は三代將軍義満が一番栄えましたけれども、後のことを何も決めないで突然高熱を發して死んでしまったのです。まあそういうものを徳川家康が非常に反面教師にしたと思います。徳川幕府は強烈な中央集権国家を作りまして、武家諸法度とか参勤交代とかをやっていますので、そういう面で徳川幕府は長く続いたというふうに思います。

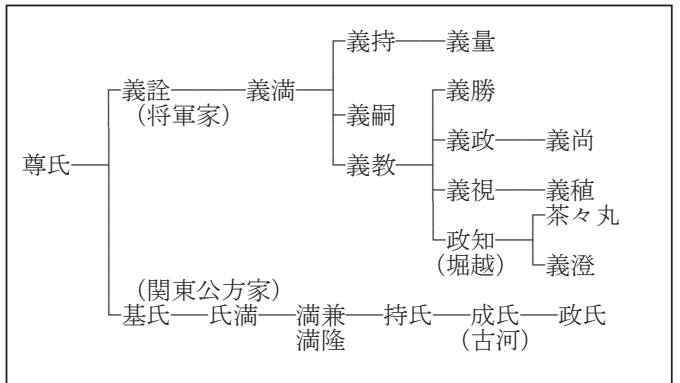
で、関東では長尾景春というのが乱を起こしまして、これはあまり知られていないのですけれども、いわゆる下剋上の始まりのような人でございます。これが関東一円で暴れまくりまして、それを太田

道灌が追って、三十数度戦って太田道灌は一度も負けたことない、と、こういう戦の名人ですね、道灌は。

それから当時の為政者は誠に凡庸な人ばかりでして、まあ血統と家柄だけでその地位についたということで、政治家が無能であると庶民は大変な苦勞をします。歴史学者に言わせると、日本で一番不幸な時代は戦国時代、二番目に不幸な時代は終戦直後であると。370万人の人が死んで、そういうことを言ってますけれども、とにかく戦国時代は女子供はもう物以下ですから、大変苦しい時代であったと。

それから最後に道灌と早雲と書いておきましたけれども、この二人は一度会った事がございます。今川家の内紛を収めるために、京都からの命令で、道灌は江戸から軍隊を率いて静岡に行っておりまして、半年間滞留しております。そこで反乱を収めております。その時に北条早雲が居て、会ったことがあると、司馬遼太郎の箱根の坂という小

表2 足利氏略系図



説に書かれておりますけれども、まあここらへんを原作にNHKで大河ドラマをやってもらえないだろうかというふうに思っております。まあ二人いれば一年間持つだろうというふうに思っております。

争乱の続いた関東

当時の関東の情勢は非常にごちゃごちゃやしまして、いろんな小説家も敬遠するのです。ただ、よく調べてみますと、構図は大変簡単でござい

まして、まず関東は鎌倉公方と古河公方に分かれておった。で、鎌倉公方は足利政知、それから古河公方は足利成氏。この時代はもう全部同族の争いです。足利さん同士で、そこに来られないもので、そこから、伊豆の堀越、今の葦山にひとつ政権があったわけ。しかし関東の左半分は関東管領の上杉顕定が治めておりました。公方の補佐役ですけれども、で、上杉家の家宰、長尾家で家督争いが起こった。家宰というのは家老ですね。長尾家が関東管領の家老をやっていたわけ。で、長尾景春という人が反旗を翻した。で、相模の守護の上杉定正というのがいますけれども、それが管領家を支援しておりました。

この上杉顕定と定正、わかりにくいんですけども、上下の関係ですね。公方というのは分かり易く言うと関東の大統領みたいなもので、関東

管領というのは関東の首相みたいなもので、相模の守護というのは神奈川県知事というふうなものです。上杉定正の家宰、太田道灌が、補佐をしておったのですけれども、ここで分かるの通り太田道灌というのは身分的にはそんなに高くないわけです。その太田道灌が関東を三十数度戦って押さえてしまったということですので、そこがまあ道灌の悲劇の原因にもなるわけですね。で、関東各地で道灌は三十数度戦って総て勝利しております。道灌は関東では超有名人になりました、結局それが主家の反感を買いました、謀殺されま

す。その後すぐに顕定と定正が長享の乱を起こすと。こういうことで上杉さん同士の戦いになるということです。足利幕府の系図を書いておきましたけれども、1338年に足利尊氏が京都に幕府を開きまして、それぞれ足利さんが京都と鎌倉に分かれて治めていくわけですけども、道灌の頃の将軍が足利義政。それから、堀越公方が政知。

足利義政の腹違いのお兄さんですね。それから関東は当時、道灌の頃は成氏。成氏のお父さんの持氏というのが本当は將軍になりたかったんです。ところが京都では義教が將軍になってしまった、これはくじ引きで決まった將軍でございまして、「くじ引き將軍」と言われていました。持氏は怒りまして、「なんだ、くじ引き將軍の言うことなんか聞か」ということで、鎌倉はもう京都とは別の年号を使っております。

この義教という人も過激な人で、「けしからん」ということで、鎌倉に軍隊を送って持氏を殺します。持氏の子どもは皆殺されたのですけれども、一番下の成氏が二歳でしたので、彼だけは助かりました。それから二十年経ってもう大丈夫だろうということ関東公方にしたのですけれども、やはりこの成氏は親父の持氏の意志を継いで京都に反旗を翻します。でまた京都は鎌倉に兵を送って、この成氏は逃げて、茨城の古河に政権を作ると、こういうことに

表3

◎山之内上杉家 (関東管領)
— 憲実 — 憲忠 — 房頭 — 顕定 — 顕房 — 憲政 — 長尾景虎
△長尾家 (家宰)
— 景仲 — 景信 — 景春 —
(忠景)
◎扇ガ谷上杉家 (相模守護)
— 持朝 — 顕房 — 政真 — 定正 — 朝真 — 朝興 — 朝定 ×
△太田家 (家宰)
— 資清 — 資長 — 資康 — 資高 — 康資 — 資綱 —
(道真) (道灌) (英勝院)

なりませす。
 関東管領のことをお話ししますと、関東管領は山内上杉家が治めておりました。もう一つ相模の守護は扇谷上杉家が定めておりました。山内とか扇谷という言葉は鎌倉の地名で、今でも残っております。山内上杉家の管領家は上杉顕定。そこを補佐している家老が長尾家です。長尾景仲、景信という名君が現われて、次は景春だというふう

思っておいたら、この顕定という上司が長尾家があまり力を持ったらいかんということ、凡庸な長尾忠景という、景信の弟を長尾家の当主にするんですね。景春は面白くないから反乱を起こすということになります。どうやらこの忠景のお姉さんか妹が道灌の奥さんらしいです。

一方、扇谷上杉家の方は道灌の頃は定正が主君でしたけれども、家老をやっていたのは太田家ですね。資清道真がお父さん、それから資長道灌と、こうなるわけですけれども、道灌はもう三代ぐらいに亘って家老をやっております、道灌が家老をやっている時は四十八歳ぐらい、五十歳近い時です。それから定正は二十八歳ぐらいです。結局、道灌からすれば小僧っ子みたいな感じで、道灌がどんだんだんどん関東で有名人になつてしましますので、定正は面白くないわけですね。で、あの関東管領の顕定が定正に耳打ちをしまして、「道灌が前首を狙っているぞ」と讒言します。定正は見境なく、

伊勢原にあります糟谷の館に新築祝いと称して道灌を呼んで、道灌が江戸城から出て、宴会に出る前に風呂に入っている時に殺してしまうわけです。道灌は死ぬ時に「当方滅亡」と言つて死にます。「当方」というのは上杉家のことで、上杉家はこんなことやってたら滅亡しますよと言つて死ぬのですけれども、その言葉通り、一年も経たない内にこの顕定と定正が戦端を開いて長享の乱を勃発させて、二十年に渡る泥沼の戦国時代ができる、こういうことです。

後、太田家は没落しまして、いろいろ頑張ったのですけれども再興出来ませんでした。再興したのは英勝院という女性でございます、徳川家康の最後の側室です。彼女の細腕で太田家は再建、再興できたという感じでございます。道灌から江戸系と岩槻系に分かれます。それから江戸系が今度は水戸系と掛川系に分かれます。私は水戸系の方の子孫になります。

道灌の戦い
 さて、古河城に対して左の側、埼玉の一番上の五十子(いっかくし)、今は本庄市ですね。ここに関東管領軍が六万人集結しておりました。何故こんなに上に上がってしまったかと言いますと、利根川とか荒川の下の方は広くて深くて渡れないものですから、上の方で行ったり来たりして、壮烈な領土争いをおつたわけです。古河公方の方も七万人ぐらいの軍勢を従えておりました。

道灌が今川家の内紛を収める為に静岡に行つている間に、この五十子のすぐ背後にあります鉢形城、これ寄居にあります。ここで長尾景春が反乱を起こします。背後を突かれた上杉軍は逃げて、群馬に臨時政権を作ります。道灌が静岡から帰つて来て江戸城に入って、それで助けに行こうとしたところ、江戸城の足下で石神井の豊島氏が反乱を起こします。道灌も、元々は鎌倉の人ですから江戸では余所者で、元からいる江戸氏とか、豊島氏からしてみれば

面白くないわけですよ。で豊高氏が反乱を起こしたと。当時江戸氏はもう力が衰えていまして、館があつたぐらいと言われております。

で、道灌はお父さんが川越城に居ますから、助けに行こうとしたらその川越街道をこの豊島氏に封鎖されてしましますので、石神井と戦うわけです。石神井からは豊高泰経、練馬城からは豊高泰明の兄弟が出てきます。練馬城っていうのは今の豊島園ですね。それで両軍は、江古田・沼袋のところで大決戦を行います。

道灌は城を一つずつ全部落としていきます。これらの城は元々、関東管領、山内上杉家の城だったわけですけども、これを道灌が取つてしまったので、扇谷上杉家の城になつてしまふわけですよ。それが関東管領から見たら面白くないということ、上杉定正に讒言してですね、「お前が危ないぞ」と言われて、定正は見境もなく道灌を殺してしまつたと。まあ道灌は仕事をやりすぎたということが言

えるかなというふうに思います。

伊東潤と言う作家が一昨年長尾景春の本を書きました。「叛鬼(はんき)」という本です。これがもう大変面白い本で、いわゆるまあ不思議な人で、長尾景春は。散々関東で暴れ回つて、最期は見事に豊の上で死ぬと、こういう方で、北条早雲が大変尊敬した人です。下剋上の走りです。

道灌の人気ー各地に道灌像

次に道灌の人気でございます。すけれども、関東には道灌に關連する寺社がたくさんござります。それから銅像が九つから十ござります。それから山吹の里がたくさん残つております。

中野駅の北に哲学堂があり、そのさらに北の方にグラウンドがございまして、その後ろに江古田・沼袋の合戦の古戦場の碑があるのですけれども、ここで合戦が行われたのは1477年4月13日ですね。グラウンドを作るので豊島塚と呼ばれていた塚を壊したら、中からたくさん人骨と

馬の骨と、それから槍、刀の錆びたのが出てきたと。リヤカー16台分、出てきたそうですから、ここで合戦が行われたのは確かであろうということですよ。

新宿の住友ビルの一階に彫刻家で有名な流政之さんが造つた猫の像があります。この下に書いてある言葉は「江戸開都の恩人太田道灌を救つた猫」と、「名前が無いから玉ちゃん」と名付ける」と、こういうふう書いてござります。

これは、すぐ近くの落合に自性院というお寺がございまして、その言い伝えによりますと、道灌は合戦の初日は敗れまして、夜道を彷徨つている時に目の前に猫が現われて「こつちへ来い」という

素振りをするものですからその後付いて行つたら、自性院の祠に入つて一晩を明かして、翌日部下が助けてくれて、盛り返して石神井に豊島氏を追い詰めて、三宝寺池に沈めて全滅したと、こういう言い伝えでござります。石神井城について申し上げれば、石神井城址に殿塚とい

う塚がございます。これは豊島泰経の塚であると言われております。

伊勢原には道灌のお墓が二つございまして、首塚と胴塚と二つに分かれており、胴塚の洞昌院に五輪の塔が建つております。ここに枯れた松の木がございまして、これは道灌の詩の友人であります万里集九が道灌が亡くなった後こへ来て、手向けの松を植えた、こういうふう書かれております。

この洞昌院の前は昔は原野でしたので、日本陸軍が大正7年11月10日に大演習を行つております。ちょうどシベリア出兵の頃ですね。そこで大正天皇からの勅使が来まして、このお墓の前で勅語を読まれました。道灌は従三位に叙せられております。「汝の造りし城は今の皇居たり」と言われまして、従五位から従三位になつております。

越生に龍穩寺という古刹があり、道灌像がござります。これは江戸時代に大変栄えたお寺で、関三利と言われた曹洞宗のお寺です。これ行つて

みましたらもう大変な山の中に、どうしてこんな山の中にかと不思議でありましたけれども、道灌のお父さんの道真が晩年を過ごした場所でございます。まあ考えて見ればこはやっぱり交通の要所でありまして、鎌倉から群馬、新潟に抜ける途中であるということでもあります。

お父さんの道真は道灌が殺された後も生きておりました。で、息子の骨を拾いに越生から伊勢原に行き、骨を拾つて更に主君であります定正に「これからも忠君を尽くします」と言つて帰つてきたわけでございます。まあ親父もずいぶん苦しかったろうと思ひます。

岩槻市の芳林寺にござります道灌像は、珍しく騎馬像であります。

新宿中央公園の裏には、道灌と山吹の娘の像があります。

日暮里の駅前にも道灌像があります。あそこには道灌山というのがございまして、江戸城の出城であつたと言われ

ております。この像ができたとき、私も行ってきたんですけど、私も、当時の鈴木知事が「回天一枝」という名前を付けて下さいました。回天、天が回る。一枝、山吹の一枝と。こういうことで、大変良い名前を付けて下さいました。

東京国際フォーラムの中にある道灌像は、皆さんご存知かと思いますが、一番有名な道灌像でございます。東京都庁の前にあつたわけで、江戸城の方を見て立っております。

これは1457年に太田道灌が江戸城を造っておりますから、その五百年後、1957年、昭和32年に開都500年祭が行われたわけです。それを記念して東京都が朝倉文夫さんをお願いして造った銅像で、これが数ある銅像の中で一番立派で、一番素晴らしいなと私は思っております。

あと、皇居の平川門の前に太田道灌公追慕之碑がございます。江戸城の石を三つ使つて、道灌を顕彰する文章が書かれております。これは道灌

没後450年、四百五十回忌の時、昭和11年です。当時の東京市長、牛島虎太郎という方が碑文を書いておられます。

山吹のエピソード

道灌と山吹の話は切っても切れない話でございます。道灌がある日、城から出て狩りに行った時に、雨に降られたものですから、近くにあつた貧しい農家に入って「蓑を貸してくれ」と言ったら、若い娘が出てきて山吹の枝を一枝、差し出すのみで黙つていたと。道灌は「いや、私は蓑を貸してくれと言っているんだ。山吹の花じゃないんだ」と、言ったのだけれども娘は黙つていたので、「もう良い」と言つて道灌は怒つてお城に帰つてしまつたと。ずぶ濡れになつて。

城に帰つてから道灌は、城の古老に「今日こんなことがあつたぞ」と言つたら、古老は「貴方それは駄目ですね。古い歌に『七重八重花は咲けども山吹の実のつだに無きぞかなしき』という歌がある

のです。この『蓑』が無いということと『実の』一つもないということとを掛けています。そんな若い娘が知つていて、貴方が知らないとは駄目ですね」と。道灌ははつと気が付いて、「ああそうか。蓑が無い程貧しかったのか。これは悪い事をした」ということで、それから猛烈に反省して一生懸命歌を勉強して、和歌の名人になつたと、こういう話でございます。

この話が文章上出てくるのは1600年代後半の老士語録です。これによると、太田道灌が江戸城から千葉の葛西に狩りに行った時に雨に降られて農家に入って「蓑を貸してくれ」と言ったら、奥から老女が「七重八重花は咲けども山吹の・・・」と歌つたと。それで道灌が「あいわかつた」と言つて帰つてしまつたわけです。

それから1739年、岡山の儒学者の湯浅常山という人が常山紀談という本を出しまして、そこには先ほど私が言つたような物語になつておるわけです。やはり儒学者で

すから、教育的に書かなくてはいけないということと、老婆だと若干インパクトが弱いので、若い娘にしたのだと私は思っております。

その後落語で「道灌」という話が作られています。この落ちが良くて、角(歌道)が暗いと言うのですけれども、良く聞いておかないと落ちを聞き逃してしまいます。

江戸市民は「道灌さん」と言つて大変道灌を愛しました。非業の死を遂げたということで、江戸市民は判官贔屓ですから、そういうのが大好きだったのでですね。

山吹の里は話が各地にございまして、埼玉の岩槻、越生、寄居、それから新宿区では山吹町という町名までございます。あとたくさんあるのですけれども、最近伊勢原市では地元にも山吹の里を作ろうというふう運動しております。こんなものは作つてしまつた方が勝ちですからどうぞ、と言っております。

道灌の和歌

道灌の頭の中を知るには和

歌を見るのが一番良いのですけれども、道灌の和歌で一番有名なのは、「急がずば濡れざらましを旅人の後より晴る野地の村雨」ですね。

これは恐らく、道灌というのは結構せつちかな人だったのでないか、自分を戒める為にこのような歌を作つたのではないかと私は思っております。

それから二番目は、戯れ歌でございます。道灌は横浜の小机城を攻める時に大変苦労しました。三カ月困んでもまだ落ちないということで、そこに総攻撃を掛けようという時に、この戯れ歌を作りました。

「小机は先ず手習いのはじめにていろはにほへとちりぢりになる」と。これに節を付けて兵士に歌わせて、突撃して小机城を落とすとしたという話がございます。

それから道灌は1465年に上洛し、後土御門天皇にお会いしております。そのとき、天皇が「武蔵野とはどんなところだ」とお聞きになりました。

たので、道灌は天皇が歌がお好きですから歌でお答えしましようという事で「露おかぬかたもありけり夕立の空より広き武蔵野の原」と答えております。夕立があつても濡れない所があるぐらい武蔵野は広いのだということで、胸を張って道灌が答えている姿が目には浮かびます。

で、「おおそうか。では都鳥というのはどんな鳥だ」と天皇が仰ったわけですが、これは有名な伊勢物語ですね。道灌は、「年ふれどまだ知らざりし都鳥隅田川原に宿はあれども」と、答えております。で、「おおそうか。では汝そんなところに住んでいるのか」と言った時に道灌が「わが宿は松原つづき海近く富士の高嶺を軒ばにぞ見る」と答えておりまして、これは大変有名な歌ですけれども、江戸城の近くまで海が来ていたということがこの歌からも証明できると思っています。

言葉の花や咲くらむ」と。武蔵野は萱とか葦とか葦とかそういうようなもののばかりと思つていたけれども、このよな言葉を聞いて花も咲く思いた、と歌を賜つたわけですが、道灌の面目躍如だったというところがございます。

江戸城と万里集九

当時の江戸城の築城のことについてもお話ししなくてはいけません、1457年、道灌が築城しております。道灌は候補地としてあちこち見て回つていきます。赤羽、湯島、江戸、品川、夢見ヶ崎、これ川崎です。加瀬山という山がございまして、そこで道灌は城を造る夢を見たと。道灌がここで城を造つておるとまた後の歴史も変わったと思うのですけれども、いろいろ調べた結果、江戸が一番良いとなつたわけですね。

ある。この城の繁栄間違いない」と言つたと伝わつております。事実、この城は一度も落城したことのない、誠に運の強い城で、無血開城なんかもございます。それから川越城、岩槻城も強固な城で、お父さんが作つたのですけれども、川を巧みに利用しておりました。江戸城は平川に囲まれ、川越城は入間川に囲まれ、岩槻城は元荒川に抱かれるようにして造られた城でございます。

江戸城の当時の地図を見ると今とまったく違つております。日比谷の入り江が深く入つてきておりまして、江戸前島という舌みたいな半島がありました。これは1590年まで鎌倉の円覚寺の所領だったんですけれども、徳川家康が入つてきてこれを分捕つてしまふわけですね。従つて江戸時代は「江戸前島」という言葉は禁句でございますので、あまり知られていないと思つています。

この地図で見ると、当時の城は東の方で、西の丸、今の皇居の方との間、真ん中に道灌濠という堀が通つております。これは昔、川だったというふうに思っています。

江戸城の道灌の館の静勝軒というところの扁額、非常に大きな幅の広い額に書かれた文章というのがあり、江戸城の様子が書かれています。徳川時代の都市計画で江戸城が全部変わつておりますので、今はもうこの文章から想像するしかないわけです。ちよつと読んでみますと、「壘の高さ十余丈」と、まあこれは20から30メートルですね。「懸崖峭立して、めぐらすに繚垣を以てするもの数十里ばかりなり」と。崖が切り立ったように立っており、周囲の垣根は数十里ばかりあります。まあ漢詩ですから若干オーバーに書いておられると思います。「外に巨溝浚塹あり」と。塹壕があると。で、「みな泉

脈通り、たたふるに鱗碧を以てす」と。泉が湧いて湛えるのに青々としておると。「巨材を架してこれが橋となし、以て出入の備へとす」と。眺ね橋ですね。「しかうして、その門を鉄にし、その牆を石にし」、牆というのは垣根です。袖垣のことです。それを石造りにして、「その徑を磴にす」、磴というのは石張りのことです。「左盤右紆してつひにその壘にのぼる」と。左に行つたり右に行つたりしてその壘に登ると。今でも東御苑のあの梅林坂を上つていただくときこんな感じが出ると思っています。

万里集九という人は道灌の詩の友人でございまして、「梅花無尽蔵」という詩の作者です。1428年生まれ。道灌より四歳年上です。若い頃は相国寺の蔵主(ゾウス)の任にあり、文名の高さで全国的に知られ、有名な雪舟の絵に讚を入れたりしたといひます。応仁の乱で寺も消失し、京を去り美濃へ行つて、それで文明17年、道灌が亡くなる一年前の9月7日、道灌の招

きで美濃鶴沼を出発、鶴沼と
いうのは今の犬山城の近くで
すね、10月2日、江戸城到着。

10月9日、江戸城で上杉定正
も臨席して歓迎会が催されま
す。その後、江戸の文人や鎌
倉五山の高僧などと交流し、
江戸城の名画を見て、万里は
驚きます。ここに李白の真
筆があったということで、こ
んなものは京都でも見たこと
がないと言つて驚きます。そ
れから元の顔輝が描いた釈迦
像を万里が見てびっくりする
わけです。これは昔相国寺に
あった絵だと。泥棒に盗まれ
て行方不明になっていたとこ
ろ、江戸城で見るとは驚いた、
と書いています。それから蔵
書が六千冊あったということ
でございます。

文明18年、道灌が建長寺、
円覚寺の長老を招いて隅田川
で船の宴を催します。これは
大変良い宴であったと万里は
書いております。6月10日、
道灌と共に越生龍穩寺の父、
道真を訪ね、歌会を催し、数
日間滞在しました。7月26
日、伊勢原で道灌は謀殺され
ます。その後万里は江戸城を

去りがたく、三年近くを過ご
します。

長享2年、1488年、万
里は江戸を發つて岐阜に帰り
ます。越生、菅谷、寄居、白井、
三国峠を越えて越後の国府に
逗留し、その後、越中、飛騨
を越えて1489年5月12
日、美濃鶴沼の旧宅に帰りま
す。三年九ヶ月の大旅行であ
りました。その後、詩歌創作
の傍ら梅花無尺蔵の編纂を行
い、七九歳で死んでおります。
結局、道灌のことを知るのは
この梅花無尺蔵という本と道
灌状という手紙、確たるもの
はそれしかないのですね。

梅花無尺蔵で万里集九は江
戸に着いた時に歓迎会をやっ
てもらったということで大
変喜んでおります。「銀燭光
を添え」、灯火が照らしてで
すね、「月漸く円なり。相州
の太守」、これ上杉定正です
ね。それが伊勢原から出てき
て、「夜、筵に臨む」、宴会が
あったと。「春風袖暖かにし
て婆娑として舞う」、道灌が
歓迎の意味で舞ったと。「旅
鬢、労を忘れ」、疲れた髪の毛
が労を忘れ、「意、仙なら

んと欲す」と。仙人になった
ような気持ちで、大変気持ち
良かったと、こういうふう
に書いております。

道灌の手紙

それから太田道灌状とい
うのがございまして、これ全
二九条からなる膨大な手紙で
す。道灌が主君の更に主君の
関東管領、頭定に出している
のですね。道灌があちこち
戦つておるわけですから、
も、その報告とそれから要求
です。その最終文に道灌の有
名な言葉が残っております。

「二両月御近辺に伺候致し、
承り及び候う如くば関東御静
謐きつとこれ有り難く候か、
関東が急に静かになつたと言
うけれども、これはありえな
いと。「諸人の不運、この時
に候、第一、御家風人のこと
調はず候」と。各地の豪族の
ことは整つておりませんよ、
と。「しかる間、上州あたり
のこと毎時狼るる様に候」と。
まだ群馬の方が乱れておりま
すと。「畢竟、つまるところ、
「断ずべきに当り断ぜられざ
る故に候か」ここが一番の肝

心なのですけれども、この頭
定というのはどうも決めるこ
とをしなかつたようですね。
「古来、国家を鎮め大乱を治
むることは、人を得るに候」
と。「古人云く、国に三不祥
あり」三つの不幸があると。
「賢人有るを知らずが一不祥。
知つて用ひざるが二不祥。用
ふるも任ぜざるが三不祥」と。

「しからば、ただ徳失は(大
切な事は)任ずると任ぜざる
とにこれ有るべく候か」と。
「これらの趣、御意を得せし
め給ふべく候。恐々謹言。高
瀬民部少輔殿」と。直接やは
り手紙を出せませんから、そ
の家老である高瀬民部少輔に
出している。こういう、大
変な名文でございます。恐ら
く高瀬民部少輔がこれら手紙
をたくさん集めて置いて、後
で公開したのだろうというふ
うに思っております。

それから次に、小田原城主
大森氏頼が扇谷上杉定正に
送つた信書がございまして。道
灌と一緒に戦つた小田原城主
氏頼、これも大変な名君です。
これが定正が道灌を殺したの
で、手紙を出しております。

「八州の安危は武の一州に
かかり」関八洲の安危は武
蔵の一州にかかり、「武(武
蔵)の安危は公の(一城(江戸
城)にかかると。「思うべ
し、関八州はただただ公の双
肩にかかりしを」太田道灌の
双肩にかかっていると。「な
んぞやその公を謀殺し、求め
て日月を地に落とすと。吾
まさに断腸の極み。君まさに
慙愧すべし」と。こういうふ
うに堂々と主君を諫めており
ます。

この大森家も、この息子が
また馬鹿なものですから、伊
豆の北条早雲から付け届けを
たくさん貰つていい気になつ
ている時に、北條早雲に一气
に小田原城を取られてしま
い、それで北条氏はだんだん
だんだん関東に出てきてし
まうということになるわけ
です。

時間が参りましたので、こ
こで終わりたいというふう
に思います。大変雑な説明で申
し訳ございませんでした。ど
うもご清聴ありがとうございました。